

# I 平城京朱雀大路発掘調査

朱雀大路は、奈良盆地を南北に縦貫する下ツ道の北方部にあたり、平城京の羅城門と朱雀門とを結ぶ京の中心街路である。近年、京に関する調査研究も次第に進み、多くの興味ある事実が明らかになってきている。朱雀大路についても、遺存地割による朱雀大路幅員の復原や、羅城門跡発掘調査による朱雀大路西側溝と西築地の検出など、調査研究が蓄積されてきている。現在では、朱雀大路周辺になお水田もかなり残っているが、開発は急速に進み、今後無秩序に開発される恐れが大きい。このため、奈良市では、遺跡の保存と、朱雀大路を生かした調和ある都市計画構想を立案する必要にかんがみ、その基礎資料を得るため今回の朱雀大路発掘調査を計画実施した。発掘調査は、奈良市の依頼により奈良国立文化財研究所がおこなった。

平城京朱雀大路それ自体を調査対象とした発掘調査は、これまでおこなわれたことがなかった。ただ朱雀大路の両端に位置する朱雀門と羅城門については、既に発掘調査がおこなわれている。朱雀門の調査は、奈良国立文化財研究所が、昭和38年度に平城宮第16次調査として実施し、朱雀門の規模を確認している。<sup>註1</sup>また羅城門の調査は、昭和44・45・46年の三年にわたり、奈良市・大和郡山市の依頼をうけた同研究所が調査を実施している。<sup>註2</sup>この調査では、平城京の正面玄関にあたる羅城門およびその周辺の遺構を検出している。羅城門は、近世郡山城築城の際、佐保川の河道を同門の中心部分につけかえたため、遺構は殆んど破壊されていたが、羅城門の規模・構造を推定できる資料を得ている。この両門の調査によって、朱雀大路の始点と終点の位置はすでに判明しているのである。

また昭和44・45年の両年度に、奈良市の依頼で、平城京保存調査会(会長榎本杜人氏)は「遺存地割による平城京の復原調査」をおこない、現在ある水田畦畔・水田・里道などの地割を通して平城京の条坊を復原した。<sup>註3</sup>これによると、朱雀大路も今日の水田畦畔や水路などで、地面上に鮮明に追跡できることが判明した。この調査によって平城京朱雀大路も、平安京朱雀大路路幅が築地心々で28丈と延喜式に記録されているものに近い規模をもつことが推測できた。しかし、平城京朱雀大路については、その規模などを示す文献史料がないため、地割によって知られる路幅が、どこからどこまでの距離を示しているか不明であり、まして路面の状況、側溝の様子などがいかなるものであるかなど、発掘調査によらなければ判らないことであった。

今回の発掘調査は、朱雀大路に関する上記の点を明らかにし、あわせて同大路の保存修景にも役立たせる目的で実施したものである。発掘地点としては、朱雀大路のほぼ中間にあたる六条間路の北側に設定した。以下、朱雀大路発掘調査の結果を報告したい。

(狩野 久)

註1 「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」(『奈良国立文化財研究所年報 1965年』)

註2 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972年

註3 岸 俊男「平城京の復元的調査研究」(『平城京の復原保存計画に関する調査研究』奈良市1972年)

## 1. 調査の経過

平城京朱雀大路の発掘調査は、昭和49年2月15日に開始し、同年3月30日に終了した。その調査期間は44日間である。発掘作業開始に先だて、2月15日から19日にかけて、まず準備作業をおこなった。発掘調査の準備として、ベルトコンベアー用の動力線引込み電柱設置と地下ケーブル線の埋設をおこない、あわせて現場小屋などの建設をおこなった。2月16日からは発掘対象地において、機械による表土排除をおこない、19日には遺構と直接関連しない地表下約1mまでの土を除去し終り、調査の前準備を終了した。

2月21日からは、本格的に発掘調査を開始した。調査は東側に設定した発掘区から始め、遺構上面をおおう茶褐色砂質土を下げると大路面があらわれ、3月1日には朱雀大路東側溝の存在と位置を確認した。3月4日からは西側に設定した発掘区の調査に移り、3月8日には、西側溝とそれに設けられた堰を検出した。しかし最初設定した発掘区では、西側溝幅を確認できないので一部発掘区を拡張した。この結果西側溝の全幅が検出でき、朱雀大路路幅を知る手掛りを得ることとなった。これと平行して検出遺構の写真撮影を順次おこなった。

計画した発掘区全域の調査がほぼ終了した3月22日には、ヘリコプターによる空中からの遺構写真測量を実施した。そのうち、発掘区全域にわたり補足確認調査をおこない、壁面の土層図などを作成した。これとともに、朱雀大路路面内で、下ツ道東西両側溝の確認や、西側発掘区での古墳時代の溝の掘り下げを一部おこない3月28日には、発掘調査を終了した。埋戻しは3月26日から開始し、調査を終了した地域から順次進めた。埋戻しは、表土除去と同様に機械によっておこない、あわせて境界柵の補修なども実施して3月30日に全作業を終了した。

(工業善通)

## 2. 発掘区の位置

今回の発掘調査対象地は、奈良市柏木町カケコン182・183・185～189番地、及び同市六条町六条183～185番地である。この位置は、朱雀大路が五条・六条の条間路と交叉する部分の北側にあたり、朱雀門と羅城門とを結ぶ朱雀大路のほぼ中間点に近いところである。現在県道「京終停車場・薬師寺線」が発掘区の南側を東西に走っており、この道路が、平城京の条間路の位置をほぼ踏襲しているものであることがわかる。

発掘地周辺は、標高57～58mをはかり、北から南へとゆるやかな下り勾配となっている。ちなみに平城宮の中心部との標高差をはかると15m以上にもなる。また東西両側へはしだいに上り勾配となるため、この付近は北と東西方からの水が集まり、湿田地帯となっている。

発掘地周辺には、まだ水田が多く残り、水田地帯の様相をとどめている。発掘地に立てば、西南には薬師寺東塔が、北方には遠く奈良山丘陵の高所が望まれる。しかしこの景観も最近の都市化の波によりしだいに失われつつある。現在発掘地の南東には県立奈良商業高等学校の校舎が、北には奈良県立工業試験場の建物が建ち、大きく変貌しようとしている。

朱雀大路については、南北に走る畦畔・水路などによる条坊復原調査から、ほぼその位置と

規模が判明している。この成果を参考にして、今回の発掘調査区を設定した。この調査では、朱雀大路とその東西両側溝の検出を目的としているが、更にこれに加えて朱雀大路に接する築地とその内方の街区の確認をも目的として計画した。このため、朱雀大路全幅を検出するだけでも全長90mに近い発掘区が必要となり、街区まで合めると100mをはるかに超える発掘区を東西に設定しなければならない。これは用地確保などの制約があり困難な問題である。

このため今回の調査では、北と南に約70m離れて東西の発掘区を設定せざるをえなかった。

東に設定した発掘区は3ヶ所にわかれ、朱雀大路東半部とその東側溝・東築地、および左京六条一坊の街区の検出を目的としている。発掘区は、東西全長70mとし、ほぼ一直線に設定した。西に設定した発掘区は、2ヶ所にわかれ、朱雀大路西半部とその西側溝・西築地、および右京六条一坊の街区の検出を目的とした。発掘区はL字形とし、西側溝を南北24mにわたって検出できるように考慮した。この発掘区は、後述するように西側溝全幅を検出するに至らず北端で一部拡張することとなった。今回の発掘面積は、東側発掘区3ヶ所で約560㎡、西側発掘区2ヶ所で約420㎡をはかり、東西両発掘区の合計980㎡（約300坪）である。

(黒崎 直)



Fig. 1 発掘調査地位置図

### 3. 遺 構

まず発掘区の土層について概観しておきたい。今回発掘調査をおこなったところは、すでに水田ではなく、耕作土の上に平均50cm前後の山土が盛土されていた。このため発掘前の地表高は周辺の水田面よりも高く、県道の路面とほぼ等しい高さとなっている。盛土した山土の下には厚さ10~20cmの黒色粘質土（水田耕土）があり、その直下に厚さ10cm前後の灰褐色砂質土（水田床土）が存在する。次に、東側発掘区では暗灰色あるいは暗茶褐色砂質土があり、西側発掘区では灰褐色粘質土が堆積している。これらの土層はともに20cm前後の厚さを持つ。東側発掘区では、この土層の下面にほぼ水平にマンガンの沈着がみられ、発掘区西端すなわち朱雀大路中央部付近ではそれが大路面に接している。西側発掘区ではマンガンの沈着面より更に下層にもう一層灰色粘土層の堆積がみられ、その下面が朱雀大路面となる。東側発掘区では耕作土以下3層まで近世の遺物を含み、西側発掘区では耕作土以下2層までが近世のものを包含し、遺構面上の2層からは平安時代から鎌倉時代初め頃までの遺物を出土する。

#### A. 朱雀大路

今回の調査で確認した朱雀大路の路面敷幅は、67.3mをはかり、東側発掘区でその東半分34.6mを、また西側発掘区で西半分25.3mを検出した。この成果からすると朱雀大路の推定心は、東側発掘区西端から約40cm東へ寄ったところにあたる。検出した朱雀大路面は、土盛した現地表面から、東側発掘区で約90cm、西側発掘区で約1.5mの深さに存在し、標高では、東側で56.8m、西側で56.1mをはかる。路面は全体を通じて黄色または青灰色の砂質土からなっており、現状ではその表面に礫敷き、瓦敷きなどの造作は認められなかった。大路の東西両側には後述する溝が設けられており、大路面はその側溝に近づくにつれて、次第に傾斜して下り、約40~50cmの差がついて路肩をなしている。この路肩には何らの保護施設も認められなかった。路面上の造作あるいは路肩の施設の有無については、調査によって検出した面が、奈良時代の路面そのものであるか否かについては、にわかに結論を下すことはできない。しかし、検出した路面両端がゆるやかに傾斜している状況からみて、後世に削平をうけているとしてもごくわずかで、奈良時代路面とさほど差のない状態をとどめていたと考えて誤りではないだろう。そうすると、路面上には何らの造作も施されなかったものと考えられよう。

朱雀大路面は自然堆積土とみられる厚さ約20cmの砂質土で形成されていた。大路面上には極めて少量奈良時代の瓦片が認められた程度で、その他の遺物は全く認められなかった。西側発掘区の大路面上には、大路西側溝からほぼ東に流れ、そののち南へ折れまがる素掘りの溝一条を検出した。この溝は、最大幅1.5m、深さ0.3mをはかり、機能については、位置的にみて後述する西側溝上層に設けられた堰と関連するものと考えられよう。

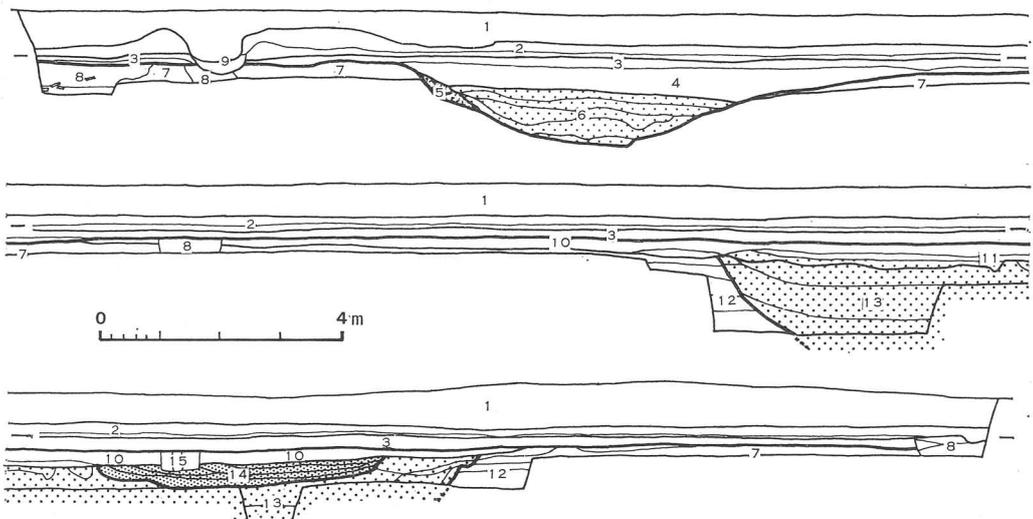
#### B. 朱雀大路東側溝

朱雀大路東縁に沿って南北に走る溝を検出した。この南北溝は朱雀大路の東側溝であり、今回の調査では南北約10mにわたって検出した。側溝の規模については溝岸に出入りがあり、また底にも大小の溜りがみられ一様ではないが、本来の溝幅は4.5m、深さ1.1m前後であること

が復原できる。側溝の西岸すなわち大路側の岸は、とくに出入りが激しく、最大1.5m前後えぐり取られ、それだけ溝幅が広がる。東岸は西岸に比べて直線的で大きな浸蝕はうけていないようである。東岸には、西岸の肩部の高さとみあう位置に幅約2mの平坦面—中段がみられる。ここには柱穴らしき遺構もみられるが、この中段がどのような性格のものであるか判らない。側溝東岸と西岸では約20cmの標高差があるが、これは大路路肩が傾斜していることによる。側溝兩岸ともに杭や石積みなどの護岸施設はみられない。側溝底には3ヶ所の溜りがみとめられた。南で検出した溜りは、長径7mを超える楕円形の大きなもので深さは45cmある。溝底の標高は発掘区北端で55.6m、南端で55.5mであり、約9mの間でわずか10cmの差しかなく、傾斜はきわめて緩い。

溝内の堆積土の状況を断面で観察すると下部は砂と粘土が互層になっており、水がよく流れていたことがわかる。溝底には暗灰色粘土層が約10cmの厚さで堆積し、その上に厚さ30cm前後の青灰色の砂層がある。この砂層中には厚さ1~2cmの粘土層が幾層もみられ、この時期に最も水がよく流れていたことがわかる。砂層の上面は凹凸があり一様ではなく、その上に厚さ20cmの暗灰色粘土層が堆積している。この粘土層の上には厚さ30cm前後の砂質土があり、大路側溝を埋めている。砂質土は色調の差で上下2層に区別できる。東岸では溝肩に接して粘土層がはりついているのが注意される。この粘土層は東岸にみとめられた中段と関連し、後に段をなくす目的で粘土をはりつけたものとみられる。

溝中から出土した遺物については、瓦片が圧倒的に多く土器類の出土は少なかった。遺物は上部暗灰色粘土層から最も多く出土した。これに次いで、この粘土層の上下に接する土層中からも少なからず遺物が出土した。瓦片についてみれば、側溝東寄りに多くみられ西岸に近づくにつれて少なくなっていた。このことは、溝の東側に瓦を葺いた遺構が存在していたことを暗示しているとみられる。また砂質土中からは獣骨が出土している。



- |         |          |           |          |            |
|---------|----------|-----------|----------|------------|
| 1 盛土    | 2 耕作土    | 3 茶褐色土    | 4 灰褐色土   | 5 青灰色粘土    |
| 6 側溝堆積土 | 7 黄色砂質土  | 8 土 塚     | 9 砂 層    | 10 青灰色砂質土  |
| 11 黄色粘土 | 12 地 山 土 | 13 下層溝堆積土 | 14 下ッ道側溝 | 15 柱 穴 (?) |

Fig. 2 大路・東側溝土層図

### C. 朱雀大路西側溝

朱雀大路西側に沿って南北に走る溝を検出した。この南北溝は、朱雀大路の西側溝であり、今回の調査では、南北約22mにわたって検出した。側溝の規模については、検出最大幅をとれば7.5m前後、深さ1m余であり、東側溝とほぼ似た規模をもつ溝であることがわかる。しかし、溝幅については、溝岸が3回以上の流水による変形あるいはそれに対する修復がみられ、本来の溝岸を明確に指摘することはできない。

西側溝の変遷については、発掘区北端の断面にみえる土層の観察から、次のように考えられる。断面の土層では2つの安定した溝底と両者に先行する溝の西岸がみとめられ、最低3回の変形修復という変遷がたどれる。最も古い時期の溝底は中位の溝によってきられて確認できないが、西岸はみとめられる。この下位溝は粗砂層を西岸とするものでこれに伴うとみられる杭も数列検出している。粗砂が溝岸をなしていることから、本来の下位溝幅は土層でみられるものよりも狭く、後に流水によって西方へ大きく浸蝕されたものであろう。杭列については、西岸の浸蝕につれて、護岸の目的で打ち込まれたものであろう。

中位溝は明確な底をとどめているが、その上部は上位溝で削り取られ、両岸を明確にできな

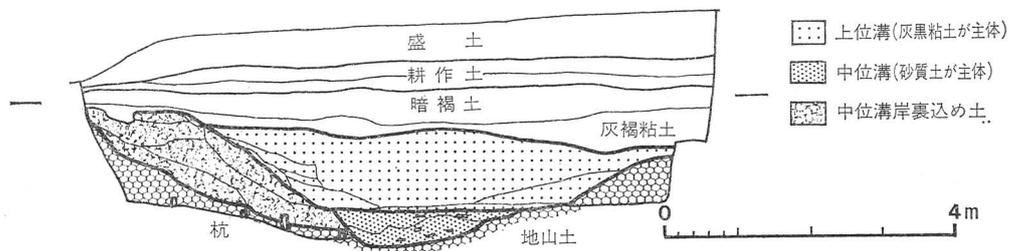


Fig. 3 大路西側溝北壁土層図

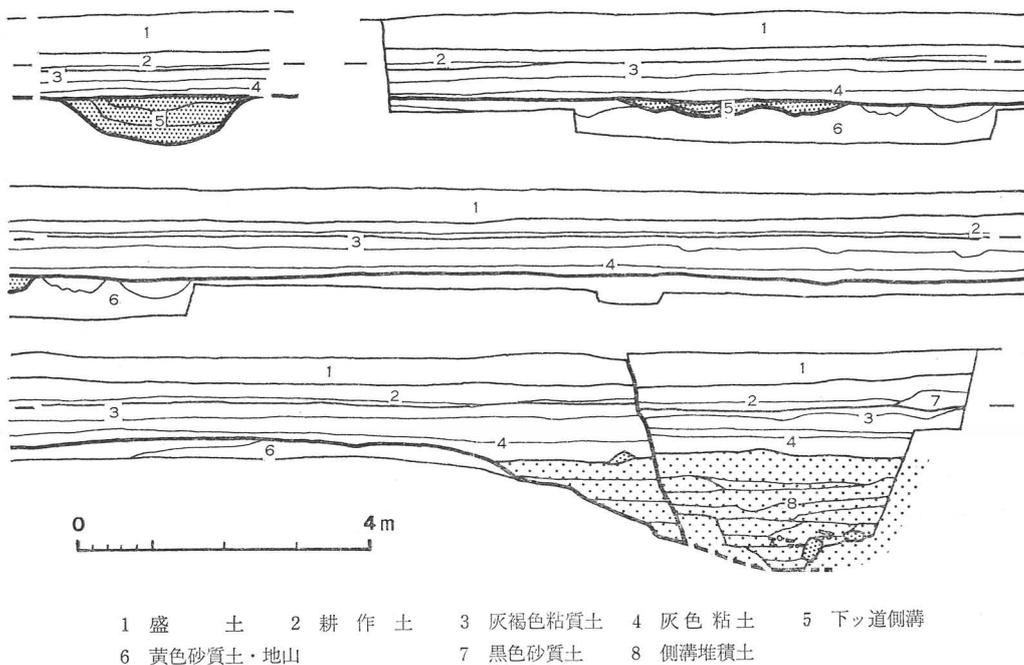


Fig. 4 大路・西側溝土層図

い。溝底には遺物を多く含む砂層が30cm前後の厚さに堆積し、その上に黒灰色砂質土層が厚さ20cm前後で、覆っている。黒灰色砂質土の上面は上位溝の底にあたる。中位溝ともなう岸については西岸にその痕跡がみられる。大きくえぐられた下位溝の西岸に砂あるいは砂質土などをはりつけて修復し、中位溝の西岸としている。しかしこの岸も上位溝の浸蝕によって変形しており、中位溝の幅を知ることはできない。

上位溝は幅3.5mの平坦な底をもち深さ約60cmをはかる。溝底には黒褐色粗砂層が10cmの厚さで堆積し、その上には灰黒色粘土層が50cmと厚く堆積している。西岸付近には岸から流れ込んだとみられる砂が堆積している。上位溝の両岸はいずれも粗砂層で形成されており、流水による変形をうけて溝幅が広がっていたことがわかる。以上のべたように溝岸の変遷が激しく、本来の溝幅を明確にできない。一応、下位溝が示す溝の最大幅7.60m、上位溝が示す最小幅6.40mという2通りの数値を呈示しておきたい。

西側溝中央やや南寄りの位置に、溝を横切る幅約5mの堰遺構を認めた。堰は約8列の杭列とそれにかためた粗枝の横木で構成している。堰は溝の主軸と直交せずやや東で南に振る主軸を持っている。おそらくせき止めた流水を東南方へ流す機能をもっていたものであり、大路上で検出した斜行溝と関連するのであろう。この堰は上位溝を埋める灰黒色粘土層を基盤として構築されていることからみて、溝の最終段階に作られたものである。

西側溝南端では、西岸の下方に径30cm程度の玉石を数個検出した。この地点は六条条間路に接する位置と推定されることから、おそらく朱雀大路と条間路との交差点における施設、例えば、橋などに関係するものかも知れない。発掘区南端における溝底の標高は54.50mであり、北端の溝底の標高54.48mと大きな差はみとめられない。

#### D. 左京六条一坊

大路側溝東側に設けた発掘区は、左京六条一坊二坪に該当する。側溝東側の奈良時代遺構面は、朱雀大路路面と同じ黄褐色砂質土である。この遺構面を覆う黄褐色粘土層中には、瓦、土器などの遺物を認める。側溝東岸から東4m以内には、ほとんど遺構はみられず平坦である。この付近に南北に走る築地の存在が想定されるが、今回の調査ではその痕跡さえもみとめなかった。その東には径1m以内の浅い土壇が点在し、中に鉄滓や焼土・炭化物がつまっていた。現水路をはさんでさらに東の発掘区でも、その西半は同じ様相を示している。この付近から、るつぽ片や粘土製らしい鋳型の断片が出土し、ここに鍛冶の工房があったことが知られる。この東には再び顕著な遺構がみられない平坦面がつづく、ここには径20~30cmの穴や幅40~50cmの小溝がみられるが性格は不明である。おそらく時期的には平安時代以降に属する遺構であろう。この部分の下層には、幅約3.8mの溝がみられる。溝は、ほぼ北から南へ流れており、深

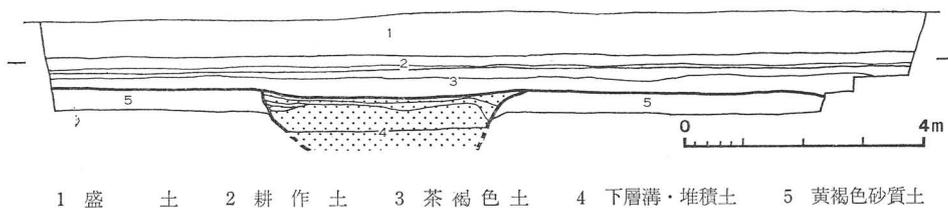


Fig. 5 左京六条一坊西半土層図

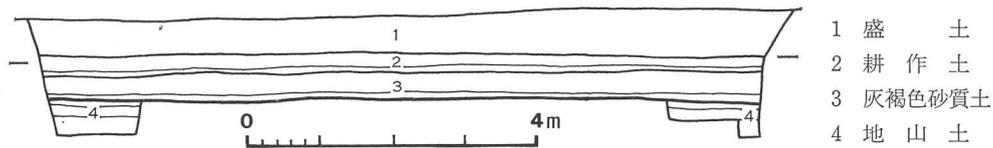


Fig. 6 左京六条一坊東半土層図

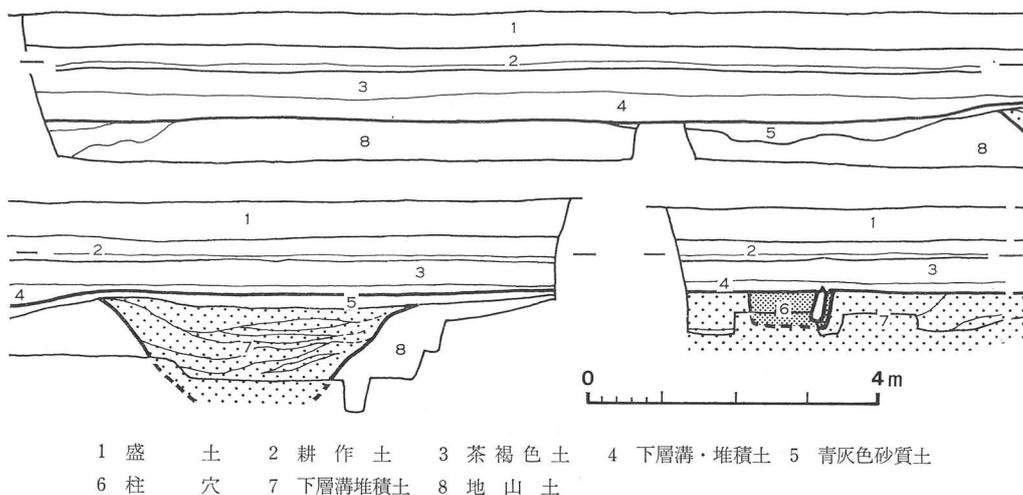
さは1 m以上ある。溝内からは遺物を検出できなかったため時期は不明である。

また今回の調査では、左京六条一坊二坪と七坪との坪境を確認するため、その推定位置を5 m×10 mにわたって発掘調査した。しかし、顕著な遺構はみとめられず、坪境も確認できなかった。しかしここからも軒丸・軒平瓦が出土し、近くに建物の存在が想定できよう。

### E. 右京六条一坊

大路側溝西側に設けた発掘区は右京六条一坊二坪に該当する。確認できた奈良時代の遺構面は、青灰色砂質土である。遺構面は東端が低く西方へしだいに高くなり、西端では約30cmほど高くなっている。この遺構面を覆う褐色土中には瓦・土器などの遺物を認める。大路側溝西岸は現畦畔に相当し、その西側に存在するとみられる築地も同じく現水路と畦畔下を走るものと考えられる。このため発掘区を可能なかぎり東まで設定して調査をおこなったが、築地はその痕跡すら検出できなかった。おそらく推定のように、幅5.5 mをはかる現水路と畦畔下に築地が存在するのであろう。検出した奈良時代の遺構は、発掘区西北隅付近の掘立柱穴1である。この柱穴掘形は東西約1.1 m、深さ40 cmをはかり、南北辺は未確認だがおそらく隅丸方形の平面をもつものであろう。掘立柱は掘形の東壁に接して配され、径約15 cm、長さ40 cmが残存していた。この柱穴に組みあう柱穴は今回検出できず、どのような性格の遺構であるのか不明である。

奈良時代遺構面の下に溝状の遺構が存在する。この溝は北西から南東に向い、幅約3～4 mの規模をもち、深さについては約1.5 mと推定できる。溝を埋める土層は砂層と暗灰色粘土層の入りくんだ土層であり、全体に多量の遺物を包含していた。溝の堆積土は大きく3層に区別できた。下層は砂ないしは砂質土層であり木質遺物が多く残存している。中層は、黒灰色粘土



1 盛土 2 耕作土 3 茶褐色土 4 下層溝・堆積土 5 青灰色砂質土  
6 柱穴 7 下層溝堆積土 8 地山土

Fig. 7 右京六条一坊土層図

層と砂層との互層であり、木質遺物は少なく土師器を多量に包含していた。上層は灰色粘土層で土師器を多く包含し、須恵器も若干含んでいる。発掘範囲が極めて小部分であるため、この溝状遺構の性格は決しがたい。しかし砂層の堆積状況からみて、土壌とは違い水の流れる溝ないしは川に近い性格のものであろう。遺物が豊富なことから、上流の近くに集落など古墳時代の遺跡の存在が考えられよう。

#### F. 下ッ道側溝

朱雀大路路面をなす黄色ないしは青灰色砂質土層の下から南北に走る2条の溝を検出した。2条の溝は、朱雀大路推定中心線をはさんでほぼ東西対称の位置に存在している。

東側発掘区では、発掘区西端から約7m東へ寄ったところから、12.8mの間で南北に土質の変化する箇所が認められた。その部分の土を取り除いたところ、幅約4.5m、深さ約40cmの南北溝を検出した。この溝の埋土中には、少量の土師器の細片を包含するが、年代を決定できるものではない。また西側発掘区では、その東端から約3m西へ寄った箇所に、幅約4m、深さ20～70cmの南北溝を検出した。溝内には粘土と砂が堆積し、この中に遺物が含まれている。遺物は土器片であり、7世紀後半を下限とする土師器、須恵器が出土している。この平行する2つの溝は、朱雀大路推定中心線をはさんで対称の位置にあり、その溝心々距離は約23mをはかる。現段階では、この東西両溝にはさまれた間を、朱雀大路設定以前の下ッ道路面と考え、両溝はその側溝と考えられる。

なお、下ッ道東側溝の下には、さらに大きな溝が存在する。この溝の西岸は、下ッ道側溝のそれとほぼ一致し、そこから約13mの幅をもつ。深さは1.5m以上あり、大規模な堀割り状の遺構である。溝の中には自然木が多量に埋没していた。この下層には厚く砂が堆積していたが、今回の調査では、発掘面積が狭小なため、底を確認できなかった。また時期を決定しうる遺物も出土せず、遺構の性格と年代については明らかでない。 (工業善通・松沢亜生)

#### G. 小 結

今回の朱雀大路確認調査は、大路面とその東西両側溝を検出することによって、一応当初の目的を達成することができた。朱雀大路の路面敷は、両側溝に接する部分——路肩にかなりの出入りがあって、いちがいに数値を示しえないが、おおよそ67mということが出来る。路面は全体を通じて自然堆積である砂質土からなっている。検出した面が、奈良時代の路面そのものではないが、前述したようにさほど大きく削平されてはいない。そうすると奈良時代路面の状況は、調査によって検出した状況と大差なく、路面には石敷きなどの造作がほどこされていなかったことが判る。路面は東西両側溝に近づくにつれてゆるやかに傾斜して下がり、路肩では路面中央部より50cmの差がある。このことから大路の横断面は、中央の高いカマボコ型を呈していたものといえよう。おそらく大路面の排水を考えての配慮であろう。

朱雀大路の東西両側溝は、いずれも素掘りのほぼ同じ規模のもので、幅6～7m、深さ1～1.5mをはかる。溝岸の補修については、西側溝でその痕跡をみとめた。流水によって岸が大きく変形されたため、土を入れてそれを補修したり、あるいは溝を深く掘ったりして計3回にわたる溝の変遷があとづけられた。東側溝でも小規模ながら岸に粘土をはりつけているのが一

部にみられた。岸の補修は街区に接する側のみ認められ、大路側にはみられない。これは、側溝岸に接して築地が存在しており、岸が大きくなると築地自体まで崩壊する危険性があるため再三にわたって補修をおこなったのであろう。東側溝では砂と粘土の互層の堆積があり、かなりの流水があったことがわかる。西側溝でも中位溝には同様の状況を示しているが、上位の溝では砂質土と粘土が堆積し、大きな流れがなかったようである。とくに堰を設けた段階では、その上流に灰黒色粘土が堆積し、そこにニナのような巻貝や二枚貝が棲息していたらしい。東側溝東岸に柱穴状の土壌があったり、西側溝南端付近に大きな玉石が散乱していたりして、溝をまたぐ何らかの施設が考えられるが、今回の調査では面積的に狭少なため、これらの性格についてはさだかでない。

大路東西両側溝の東側および西側には、溝に平行して南北に走る築地が存在したと考えられるが、今回の発掘調査では検出することができなかった。東側での築地想定位置には、焼土や鉄滓などが入った土壌群があるだけで築地の痕跡すらも認め得なかった。また西側の築地は、西側溝の西に接してある現在の農道下に埋没しているとみられ、ここでも築地を認めることはできなかった。しかし築地の存在については、東西両側溝の堆積土層中に多くの瓦が含まれており、遺構の上からは存在をみとめることができない築地が、溝外方に平行して走っていたことを想定できよう。

左京六条一坊二坪では、その西寄りの部分に、鉄滓・焼土などを含む土壌を検出した。この位置に鍛冶の工房跡の存在が想定できるが、調査では建物などそれに関連する明確な遺構を検出できなかったため、これ以上積極的な考えを示すことは不可能である。ただ土壌が築地想定上にまで分布することから、土壌が奈良時代末以降のものである可能性が大きい。今回最も東に設けた発掘区は、二坪と七坪との坪境を確認する目的であったが、小路や側溝などの遺構を検出することはできなかった。

右京六条二坪では、西側溝の中心線から西へ20mまでは遺構面が低く、それより以西は約30cm高くなっている。発掘区西北隅付近で柱根をとどめる柱穴を検出した。柱穴が1箇所しか認めえなかったため、遺構の性格と規模は不明である。しかしこの二坪では、この付近から地盤も高くなり、これ以西に坪内の主要な建物が拡がっていたものと考えられる。更に広く調査をおこなえば、これらの問題はより明確になるだろう。

朱雀大路路面下には、下ッ道の東西両側溝と想定した2条の南北溝がある。この両溝は、心々距離が約23mあって、その間の中心線が朱雀大路の中心線と一致することを知り得た。両側溝に挟まれた下ッ道々幅は、かつて平城宮朱雀門北側で確認したその道幅とほぼ一致する。このことから朱雀大路造成にあたって、下ッ道を基本的に踏襲し東西に路幅を拡げるという計画で朱雀大路が設定されていることが裏づけられよう。この両側溝出土の遺物は5世紀前半頃の須恵器片から7世紀末頃の土師器片であり、全体に出土量が少ないこともあって、溝の上限を明確にすることはできなかった。ただ下限については、先に述べた朱雀門北側で確認した下ッ道側溝(SD1900)の年代にほぼ一致するのであろう。

西側発掘区西端で西北から東南へ流れる古墳時代の溝を検出した。この溝からは多量の土師器をはじめ木製品も出土した。発掘範囲が狭少なため、集落などとの関連は一切不明だが、遺物の埋没状況からみてさほど遠くない場所に同時代の集落が想定できる。平城京城内というこ

とで、それより古い時期の遺跡については十分に注意されていないのが現状である。平城宮域内の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が多くみつまっている。今後これらについても充分注意していかなければならない。(工楽善通・黒崎 直)

## 4. 遺物

遺物は大路両側溝・土壇や奈良時代以前の溝などから出土し、瓦・土器・木製品・金属製品など各種にわたる。とくに大路両側溝と西側発掘区古墳時代溝からは良好な遺物を得た。一部には未整理の部分もあるが、大半は整理を終了している。以下これらについて報告する。

### A. 瓦類

瓦類は主として朱雀大路両側溝から集中して出土した。軒瓦および丸・平瓦とも量的には少ない。軒瓦は、軒丸瓦5型式7個体、軒平瓦2型式9個体である。なお、軒瓦の型式番号は奈良国立文化財研究所で設定した番号<sup>註1</sup>を使用する。

**軒丸瓦** 1は6225-A型式で、内区に複弁8弁蓮華文を配し、外区外縁に凸鋸齒文をめぐらす。1+6の蓮子をもつ中房は大きく作られる。外区内縁には圈線をめぐらす。内外区を画する界線とともに、2重圈線にみえる。本型式は、平城宮式と呼ばれるもののひとつで、平城宮跡、とくに第2次朝堂院地域で使用されたものである。<sup>註2</sup>

2は6304-B型式で、内区に界線で囲んだ複弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文、外縁に線裾齒文をめぐらす。1+6の蓮子をもつ中房が突出することは本型式の大きな特徴である。類例は、平城宮跡、薬師寺で出土している。

3・4・5は6316型式で、いずれも内区の主文として間弁のない隣接した複弁8弁蓮華文を配する。この型式は、蓮子・珠文の数、中房の高まりなどによって、8種(A~F・H・I)に細分できる。今回の調査では、6316-Dbとさらに2種の新型式(G・J)が出土した。6316-Db(3)は、1+4の蓮子をもつ6316-Daに蓮子を彫り加え1+8の蓮子としたものである。本例がDbであることは、蓮弁と界線の間にある範のキズによって確認できる。新型式6316-G(4)は1+7の蓮子もち、中房は凸である。丸瓦の取付けは低く、接合部内外面ともに粘土を厚くあてて。接合線は台形を示す。また新型式6316-J(5)は1+7の蓮子もち、中房は凸である。瓦当面は全体に細かな気孔が入って荒れている。丸瓦との接合部には、前者と同様に粘土を厚くあて、接合線は台形を示す。丸瓦部外面は縦方向のヘラケズリで丹念に調整する。これら6316型式の類例は、平城宮跡、平城京羅城門周辺、西隆寺で出土している。

その他、外区文様のみの小片であるが、新型式が出土している。外区内縁には比較的大きく、突出した珠文を配している。外縁は斜縁で、めぐらされた細かい線鋸齒文は外区内外縁を画する圈線には接していない。外縁の外側0.8cmのところに範端を示す痕跡がみられる。

また、外区のみ的小片であるが、巴文が出土している。内縁には珠文を配するが、通常みられるような等間隔には配置しない。外縁は直立縁である。中世の所産である。

**軒平瓦** 7は6710-Ab型式で、山形の中心飾の左右に3回反転の均整唐草文を配し、

外区に珠文を疎にめぐらす。文様の線も太く、丁寧な彫刻ではない。顎は曲線顎である。平瓦の凹面は、瓦当・側縁周辺を調整しているが、布目が全面に残る。凸面は縦方向にヘラミガキし、いぶし焼のような光沢をもつ。瓦当面から7.5cmの位置に丹土が付着しており、軒先からの瓦の出が明らかである。類例は、平城宮、羅城門、西隆寺跡などで出土している。

6は、6685-C型式で、花頭形の中心飾の左右に3回反転の均正唐草文を配し、外区に珠文をめぐらせた小型軒平瓦である。顎は欠失している。類例は、平城宮跡で出土している。

(森 郁夫・岡本東三)

註1 軒瓦の型式番号標示については、『平城宮発掘調査報告Ⅱ』(1962年5月)116・117頁を参照されたい。なお、この型式番号は年代の先後を示すものではないことを付記する。

註2 「昭和43年度平城宮発掘調査概報」(『奈良国立文化財研究所年報 1969』)

## B. 土器類

今回の調査で多くの土器類が出土した。このうち、朱雀大路と関連する奈良・平安時代初頃の土器類には、土師器と須恵器が大多数を占め、他に緑釉陶器が1点、模型カマド形土器1点がある。またこの他に古墳時代の土器も多く出土している。とくに西側発掘区で検出した溝からは、古墳時代の土師器が多く出土しており器種も多様である。

**奈良・平安時代の土器** 土器の多くは遺構上面の遺物包含層から出土したものであり、朱雀大路東西両側溝や路面など遺構と直接関連して出土したものは少ない。土器類はその大半が小さな破片となっており、原形をうかがい知ることのできるものは極めて少数である。

**土師器** 朱雀大路側溝出土の土師器には、杯A、杯B、皿A、高杯、盤、壺、甕がある。このうち杯B、壺、甕は小片すぎて、もとの形を十分に復原できず、記述からはぶく。

**a. 杯A** 全体のわかるものは1個体のみである。2は上り底の小さい底部と直に開く口縁部からなるもの。内面および口縁部外面の上半まで横撫でし、他は不調整のいわゆるe手法によって調整し、口縁部外面に1条の沈線が走る。他に、外面を篋で削り、内面に2重の螺旋暗文と放射暗文を施した底部の破片と、内面に放射暗文を施した口縁部破片がある。

**b. 皿A** 3はわずかに屈曲する短い口縁部と平底からなるもので、口縁部は丸く内側に突出する。口縁部内外を横撫でし、底部外面は調整しない。

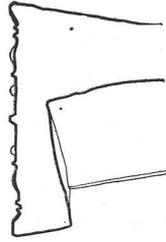
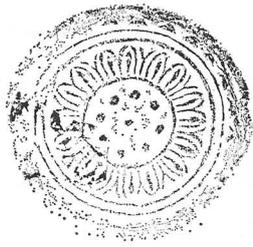
**c. 高杯** 脚部の破片と杯口縁部破片が各1個体ずつある。脚部は棒芯を用いて成形し、外面を篋で8角形に面取りしている。口縁部は浅い杯部のもので、端部内側が上方へ突出する。内面に螺旋暗文を施し、外面を丁寧に篋磨きする。

**d. 盤** 平らな底部と外反して開く口縁部からなり、その外面2ヶ所に、粘土板で作った三角形の把手がつく。口縁部内面の端部寄りに放射暗文を施し、その下に螺旋ないしは連弧暗文を施す。外面には全体に篋磨きをおこなっている。

**須恵器** 朱雀大路側溝出土の須恵器には、杯A・杯B・蓋・壺A・壺E・瓶・平瓶・甕がある。このうち杯A・蓋・平瓶・甕は小片であり、もとの形を十分に復原できず、記述からはぶくこととする。

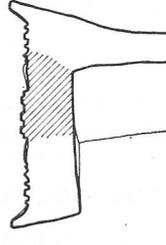
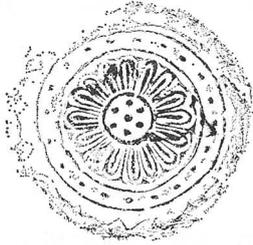
**a. 杯B** もとの形を復原できるものは2個体である。5は外端部の突出した低い高台のつくもので、口縁部はわずかながら外反する。口縁部外面下半に篋削りを施している。

**b. 蓋A** 4は口径20.5cm、高さ2.3cmで平坦な頂部とわずかに屈曲する口縁部からなり、



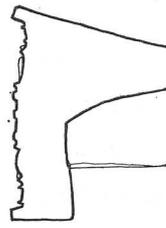
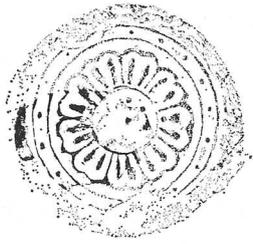
1. 複弁8弁蓮華文 (6225A)

瓦当—復原径 16.7cm · 厚 2.8cm, 内区—中房径 6.8cm · 蓮子 1+8 · 弁区幅 2.7cm, 外区—内縁幅 0.7cm · 外縁幅 1.3cm · 凸鋸齒文 24, 灰色, 胎土砂含む。



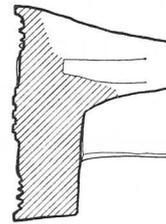
2. 複弁8弁蓮華文 (6304B)

瓦当—復原径 16.7cm · 厚 2.3cm, 内区—中房径 3.7cm · 蓮子 1+6 · 弁区幅 3.2cm, 外区—内縁幅 1.4cm · 珠文 20 · 外縁幅 1.6cm · 線鋸齒文, 黒灰色, 胎土緻密。



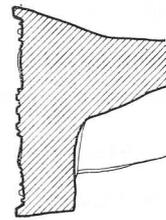
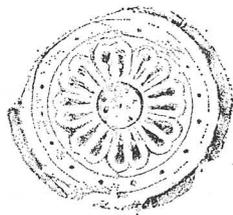
3. 複弁8弁蓮華文 (6316Db)

瓦当—復原径 16.0cm · 厚 4.7cm, 内区—中房径 5.1cm · 蓮子 1+8 · 弁区幅 3.2cm, 外区—内縁幅 1.0cm · 珠文 17 · 外縁幅 1.2cm · 素文, 灰黒色, 胎土砂含む。



4. 複弁8弁蓮華文 (6316G)

瓦当—径 15.5cm · 厚 4.9cm, 内区—中房径 4.0cm · 蓮子 1+7 · 弁区幅 3.3cm, 外区—内縁幅 1.2cm · 珠文 · 外縁幅 1.7cm · 線鋸齒文, 灰色, 胎土砂 · 小石含む。



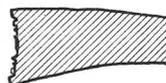
5. 複弁8弁蓮華文 (6316J)

瓦当—径 15.2cm · 厚 3.8cm, 内区—中房径 3.4cm · 蓮子 1+7 · 弁区幅 3.4cm, 外区—内縁幅 1.1cm · 珠文 16 · 外縁幅 1.6cm · 線鋸齒文, 灰色 · 胎土緻密。



6. 均整唐草文 (6685)

瓦当厚 4.7cm, 顎不明, 珠文—上外区 · 下外区不明 · 脇区 2, 灰白色, 胎土砂多量に含む。



7. 均整唐草文 (6710Ab)

瓦当厚 5.7cm, 曲線顎, 珠文—上外区 13 · 下外区 13 · 脇区 2, 凹面—布痕アリ, 凸面—縦方向ヘラケズ · 丹附着, 黒灰色 · 胎土緻密。

Fig. 8 軒瓦拓本 · 実測図

偏平な宝珠つまみがつく。内面はロクロ上で撫で、頂部外面は篋削りののち撫でて調整する。

c. 壺A いわゆる薬壺である。8は直線的に張り出した肩部と直立する短い口縁部からなり、肩部外面には自然釉が付着している。胴部および底部は残存しない。

d. 壺E 7はロクロの上で器体を挽き出し、糸切りによって切離して成形したもので、体部外面にはロクロ目が、底部外面には糸切りの痕跡が明瞭にみとめられる。

e. 瓶 9は瓶の口縁部の破片である。直角に近く外反した口縁部の端部を内側に折り曲げたもので、頸部内外面にしぼり目の痕跡がかすかながらもみられる。口縁部径8.9cmをはかる。

**緑釉陶器** 朱雀大路西側溝上層から出土した緑釉陶器がある。1の皿がそれで、口径14.5cm、高さ2cmに復原できる。器体の全面に濃緑色の釉を施している。底部は糸切り高台であり、外面に「十」形の篋刻線がみられる。胎土は微砂粒を含み、黄灰色でやや硬質である。

**模型土器** 竈のミニチュアが1点出土している。筒形の体部の1箇所を方形に切り取って焚口に作り、焚口の周囲に低いひさしを取りつけて竈に似せたものである。

**土馬** 大路東側溝東方の遺物包含層から土馬1体が出土した。胴部・尾部・左後脚部をとどめるが、原形を充分に知ることはできない。胴部と尾部は一連に作り、脚部を接合したものである。奈良時代前半期に属するものと考えられる。(吉田恵二)

**下ッ道側溝の土器** 東西両側溝から土器が出土したが、東側溝のものは磨滅した土師質の細片が少量あるのみで、ここでは西側溝出土のものについて述べる。土器には土師器と須恵器があり、いずれも溝堆積土上部の褐色砂層から出土している。

**土師器** 甕と高杯がある。いずれも磨滅の著しい破片である。

a. 甕 体部の小片が1個体あるのみで復原できない。内外面に粗い刷毛目を残し、6mm前後の厚さをもつ。砂粒を多く含む胎土で焼成は堅い。

b. 高杯 破片であるが5個体分ある。18は杯底部と脚部上端をとどめる。調整は不明だが茶褐色を呈し、細砂を若干含む緻密な胎土で焼成は堅い。

**須恵器** 杯・蓋・有蓋高杯・甕・甗などがある。

a. 杯 13は口径10cm前後と推定でき、内傾するたちあがり外上方にのびる受部がつく。体部下半をロクロ削りする。淡青灰色を呈し堅緻な焼成である。

b. 蓋 杯蓋が2個体ある。11は口径13cm前後のもので、口縁部と天井部とをわける稜は細く丸味をもって突出する。天井部の3分の2ほどはロクロ削りする。12もほぼ同じもので、ともに青灰色を呈し堅緻な焼成である。12は13と胎土・焼成の特徴が共通する。

c. 有蓋高杯 破片を含めて3個体ある。14は口径9.6cm、高さ9.3cmで丸みをおびた杯部に三方透しを配した短い脚部がつく。透しは下方に広がる長方形で配置は不均斉である。15・16は脚部の破片である。いずれも青灰色で、砂粒をほとんど含まず、焼成は堅い。

d. 甕 5個体分の破片がある。いずれも体部の小片で原形は知りえない。内外面の叩き目を消し去っているものが多い。

e. 甗 17は大型の甗とみられるものである。明確な肩を有し、そこに浅い櫛描波状文がみられる。口縁部と底部は現存しないが、突帯をめぐらす口縁とやや尖る底部に復原できる。

**古墳時代溝出土の土器** 西側発掘区で検出した古墳時代の溝からは多くの土器が出土した。この溝の堆積土は上・中・下の3層に区別できる。上層からは土師器と須恵器が出土した

が、中・下層からは土師器のみが出土し、須恵器を含まない。

**下層出土の土器** 土師器のみに限られる。器種には、壺・甕・高杯がある。

- a. 壺 33は平底ぎみの丸底をもつ大型の壺である。体部全面に細かい刷毛目があり、上半ではそのうえに縦の篋磨きがまばらにほどこされている。赤褐色を呈する。
- b. 甕 体部の小片が8個体分ある。厚さ3～4mmで、外面に刷毛目をほどこし、内面を篋削りするものが大部分である。灰褐色を呈し、外面に煤の付着するものが多い。
- c. 高杯 3個体ある。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は堅く遺存は良い。21は口径21cmをはかり杯部外面に稜をもつ。口縁部内外面と稜の部分の横撫でし、その他を撫でで仕上げる。内外面に調整前の刷毛目を残している。脚部は外面を縦に篋削りし、内面上端に棒状具の先端の圧痕がある。明褐色を呈する。22は同様の器形で、口径が17cmとひとまわり小さい。内面には矢車状に刷毛目を残す。茶褐色を呈す。

**中層出土の土器** 土師器のみに限られる。器種には、壺・甕・器台・把手付鉢・高杯がある。すべて胎土に砂粒を含み、焼成は堅く、遺存は概して良好である。

- a. 壺 5個体ある。二重口縁をもつものと単純に外反する口縁のもの、それに小型のものがある。29は二重口縁をもつ壺で、口径12cm、高さ16cmをはかる完形品である。底部は上げ底で、下膨らみの体部をもつ。口縁部外面は鋭い稜をなして外反する。口縁部内外面は横撫でするが、内面にはさらに縦の篋磨きをほどこす。体部外面は上半を斜めに篋磨きし、下半はとくに調整しない。底部は篋削りしている。32も二重口縁をもつ壺であるが29と異なり、口縁部がほぼ垂直に立ちあがるものである。口縁端部は肥厚しており、口径19.6cmをはかる。口縁内外面とも横撫でで仕上げる。茶褐色で焼成はきわめて堅い。他に32と類似する破片が1点ある。31は単純に外反する口縁部をもつもので推定口径18cmである。口縁部は一旦立ちあがって外反する。外面は刷毛目のち横撫でして仕上げている。内面が灰色、外面は灰白色を呈す。30はいわゆる小型丸底土器と呼ばれる壺である。口径8cm、高さ8.9cmをはかる。体部は最大径が中位よりやや上にある扁球形を呈す。口縁部は下端がくびれ、内外面を横撫でして仕上げる。体部の内面は篋削りしているが外面は不明である。
- b. 甕 8個体ある。これらは口縁端部内面が肥厚するものが大半である。35は口径16.4cmをはかり、口縁部はゆるやかに屈折して球形の体部につづく。口縁部内外面は横撫でし、体部上端にも横撫でがおよぶ。以下は刷毛目がみられる。体部内面は上端にしぼり目と指頭圧痕を残し、以下を横に篋削りしている。明褐色を呈す。36は35と同様で明褐色を呈す。37は復原口径14.5cmをはかるが、上記の甕と異なり、口縁部は直線的である。内面は灰色、外面は灰白色を呈す。その他は器壁厚が4mm前後の体部の小片である。外面に刷毛目があり、内面を篋削りしているものが多い。また外面には煤が付着している。
- c. 器台 34は浅い受部と直線的にひろく脚部とからなり、脚部に丸い透し孔がある。脚部外面を横に篋磨きし、内面は撫でで仕上げるが、上端にはしぼり目が残る。茶褐色を呈する。
- d. 把手付鉢 28は口径8.4cm、高さ10.2cmをはかり、小型の鉢に一对の把手をつけたもの。把手は断面円形で外面からはめ込んでとりつける。口縁部内外面は横撫でで、体部内外面は撫でで仕上げていく。灰白色を呈す。
- e. 高杯 16個体ある。杯部外面に稜をもつもの(25)と稜をもたないもの(23・24・26)があ

る。25は21とほぼ同形・同大のものである。内面に太い篋磨きが放射状にほどこされている。灰褐色を呈す。23は口径16.8cm、高さ13.6cmをはかる完形品である。脚部は内面で稜をなして裾部に至る。杯部の内面と外面上半は横撫でし、下半は撫でている。脚部は内面を横に篋削りし、外面は縦の篋削りののち撫でて仕上げる。裾部は内外面とも撫でて仕上げ、横撫ではみられない。灰褐色を呈す。26は同様の器形であるが、外面に刷毛目がある。また脚部内面はしぼり目の下半以下を篋削りする。茶褐色を呈す。24も23と同様のものであるが外面に煤が付着している。暗褐色を呈す。27は脚部に3個の丸い透し孔をもつ。裾端部内外面のみ横撫でて仕上げる。裾部内面上半は横に篋削りしている。この他に杯部や脚部のみをとどめる破片があるが、組みあうものはない。脚部のみをとどめるもの6例のうち4例は3個の透し孔をもつが、他の2例は透し孔をもたない。

**上層出土の土器** 上層からは中・下層と異なって土師器とともに須恵器が出土している。

**土師器** 壺・甕・鉢・高杯がある。すべて砂粒を含む胎土で焼成は堅い。

**a. 壺** 大型のもの1点、小型のもの2点の計3点ある。51は31に類似する大型の壺である。刷毛目は体部外面にもみられる。灰白色を呈す。49・50はいわゆる小型丸底の壺であり、ゆるく内弯する口縁部と扁球形の体部からなる。口縁部内外面は横撫でて仕上げ、体部内面は上半にしぼり目を残し以下を横に篋削りする。体部外面は刷毛目がみられる。49は口径8cmをはかる。50はやや頸部が細く、内面の篋削りは体部中位より下にみられ、器壁を極めて薄くしている。ともに明褐色を呈す。

**b. 甕** 6個体ある。口縁部に変化がみられ、端部が内側へ肥厚するもの(53・56)のほか、端部が肥厚せず外反するもの(54)、内弯するもの(55)、直線的にひらくもの(52)がある。56は口径15.4cmをはかる。肩をもつ球形体部の外面は刷毛目のうゑに篋描波状文がある。53は口径18.8cmをはかる。口縁部は外反し、端部が内側へ肥厚する。口縁部内面に横撫で前の横の刷毛目が残る。内面は漆黒色を呈す。54は口径14.5cmをはかる。口縁部は外反し、体部はゆるい肩をもつ球形である。内面は漆黒色、外面は灰白色を呈す。55は口径15.6cmをはかり、口縁部はゆるやかに内弯する。体部は明確な肩をもたない。52は口径14cmをはかり、口縁部は直線的にのびる。内外面の調整は55と同様である。

**c. 鉢** 48は口径8.2cm、高さ6.8cmをはかる小型の鉢である。頸部がくびれる。口縁部内外面は横撫でて仕上げ、体部内外面と底部内面は撫でて、底部外面は篋削りで調整している。

**d. 高杯** 14個体ある。杯部外面の稜の有無によって2大別される。43は稜をもつもので口径22.4cmをはかり、口縁部は直線的である。内外面を横撫でて仕上げる。明褐色を呈し外面には煤が付着している。44もほぼ同様のもので、杯部外面の稜は立上りをもって屈曲し、外上方にのびる。内面には刷毛目がある。灰白色を呈す。杯部外面に稜をもたないものには、口縁端部が外反するもの(41)、ほとんど外反しないもの(38・39)、口縁端部が内弯するもの(42)などがある。これらの杯部の調整をみると、外面に刷毛目をもつものは39のみで、他は撫でて仕上げる。(40)は口縁端部に外傾する平面をもち、作りは丁寧である。脚部のみをとどめるものの器形は45で代表されるが、他に47のようにずんぐりしたものが少数ある。透し孔をもつものは全体に少なく、とくに後者にはない。透し孔は円形で、3個の例が多いが、1個の例(45)もある。外面の調整は篋削りの上を撫でて仕上げるが、まれに篋削り前の刷毛目を残すもの

がある。撫では裾部内面にまでおよぶ。内面の調整は横に篋削りするが、しぼり目の残る位置に差がある。42・45は裾部に、47は上端に、46は裾部なかほどにそれぞれしぼり目が残る。また裾部内面を刷毛目で調整するもの(46)もある。

**須恵器** 蓋・甗がある。いずれも胎土には微量の砂粒を含み焼成は堅緻である。

**a. 蓋** 58は杯蓋である。口径12.6cmをはかる薄手のもの。天井部と口縁部とをわける稜は突出し、先端は丸い。口縁端部は内傾して凹面をなす。稜の部分の径と口径は一致する。天井部の4分の3ほどをロクロ削りし、他はロクロ撫でとする。淡い紫色を呈す。

**b. 甗** 57は小型の甗である。口径8.4cm、高さ10cm前後に復原できる。体部は扁球形を呈し、最大径は体部の中位よりやや上にある。円孔が穿たれている。口頸部外面には断面が丸い稜が突出している。頸部から体部上半はロクロ撫で、体部下半は撫でで仕上げる。青味がかかった黒色を呈す。

(千田剛道)

### C. 木製品

今回の調査によって、朱雀大路東西両側溝と、西側発掘区で検出した古墳時代の溝から木製品が出土した。朱雀大路両側溝では、溝底に近い砂を多く含む粘質土中に木製品がみられた。しかし、いずれも加工痕を若干とどめる小木片にすぎず、原形なり用途なりを十分に明らかにできるものはない。両側溝出土の木製品に比して、西側発掘区の溝からは、多くの木片とともに農具をはじめとする木製品が10点余出土した。ここでは、朱雀大路両側溝出土の木製品は除外し、原形が推定できる古墳時代の木製品についてのみ記述することとした。

古墳時代の溝は、溝堆積土が上・中・下の3層にわかれ、木製品は中層から下層にかけてみとめられた。このうち原形をとどめる木製品は下層に集中し、粘質土を若干含む砂層中から出土したものである。木製品には、スキ3点、キネ1点、クワ形木製品1点、部材1点、えぐりのある木製品1点がある。

1はスコップ状を呈するスキである。鉄刃を着装するフロ部の約2分の1をとどめる。カン材から作り、全長36.8cm、復原幅2.1cm、厚さ1.4cmをはかる。上部は幅2.1cm、高さ0.6cmの突帯を作る。中央部分には長さ7.4cmの長方形の孔の痕跡がみられるが、孔幅は不明である。先端は、幅・厚さとも狭く作り、側縁辺の削りも面取り風に丸味をもち、鉄刃を着装することがわかる。柄の状況は不明である。

2・3はナスビ形木製品と呼ばれているスキの破片である。いずれもカシの柾目材から作る。2は柄に近い部分をとどめるが、状況からみて未製品であることが判る。なお、下端は鉄刃で直線的に切断されており、製作を中止して後に手を加えたことがわかる。現存長29.4cm、現存幅1.8cm、厚さ1.4cmをはかる。3は柄部の小破片で、船底形の断面をもつ。破片が小さいため、ナスビ形木製品に復原できるものとは断定できない。現存長7.2cm、現存幅3.6cm、厚1.9cmをはかる。

4はクワ形木製品である。一側を失うため全体の形状は不明であるが、頭部近くに楕円孔があり、中央側辺部にみられるえぐりなどからクワに非常に近い形態を示す。ただ、頭部楕円孔自体、柄を挿入するためにはやや不適當なものであるとともに、先端部のえぐりの状況や材自

体が針葉樹であり、カン材を使用していないことなど、クワとは若干様子が異なる。全長31.3cm、現存幅9.8cm、厚さ0.9cmをはかる。

5はV字形のえぐりのある木製品である。針葉樹の板目材から作る。板材の中央部一側辺から、上部幅11.5cm、深さ7.3cmのV字形のえぐりを入れる。両木口には径1.2cm前後をはかる孔がみられるが、両者とも深さは浅い。全長25.5cm、幅9.6cm、厚さ1.2cmをはかる。

6は柄穴を11孔もつ部材である。広葉樹の板目材から作る。全長78.2cm、幅5.5cm、厚さ1.7cmの板材の両端を円く作り、一面を平坦に削り、他面は面取り風に削る。このため横断面形は台形を呈する。柄穴は長さ2.3cm、幅1.1cmをはかる長方形で、ほぼ垂直に穿たれており、約7cm間隔で11孔をかぞえる。全体に腐蝕が著しく加工の細部は不明である。

7はキネである。カンの心持ち丸太材から作る。両端はほぼ等しい径を持つが、上端からはしだいに径を減じて削り込み、下端から約30cmの間はほぼ等しい径をもつが、そのうち明確に稜をつけて径を減じて削り込む。このため上下対称形のキネとはならない。下方は樹皮をそのままとどめており、未製品であることがわかる。このことは両木口面ともに使用による磨滅がみられず、加工の痕跡をそのままとどめていることからもうなづけよう。全長133cm、最大径8.1cm、最小径3.6cmをはかる

#### D. その他の遺物

前述した瓦類・土器類・木製品のほかに、銅銭・鋳型・鉄滓などの遺物が出土している。

**銅銭** 調査によって5点の銅銭が出土した。内訳は万年通寶3点、神功開寶2点である。1の万年通寶は、朱雀大路西側溝の溝底に近く堆積した砂層中から出土したもの。2の万年通寶と4・5の神功開寶の3点は、大路東側溝東方で検出した鍛冶工房跡周辺から出土したものである。また、3の万年通寶は、ほぼ同地点の、上部の床土中から出土したものである。

**鋳型** 粘土を焼成して作った鋳型である。一面に内弯する曲面をとどめるが、他は破損しており、これから鋳造された製品が何であるかは不明である。現存長7cm、現存幅6.3cm、現存厚4.6cmである。大路東側溝東方の鍛冶工房跡から出土した。

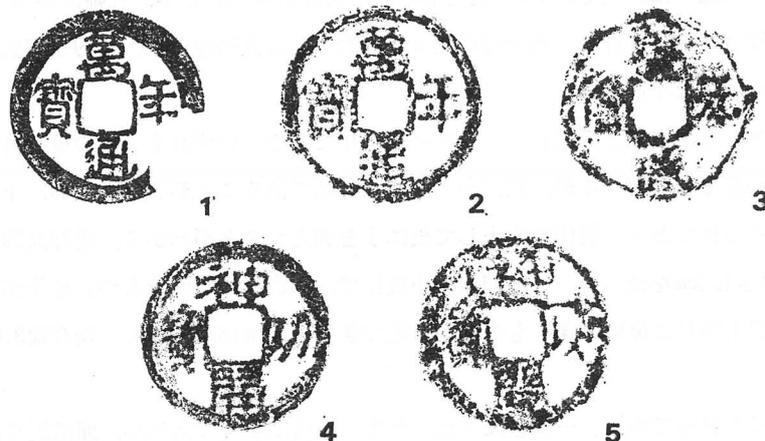


Fig. 9 銅 銭 拓 本

銭貨名	外縁径	内縁径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	出土地区
1 萬年通宝	25.6	20.0	7.9	5.8	1.6	0.8	4.35	6 A I A D56
2 "	26.5	22.2	8.3	6.3	2.0	1.1	3.65	6 AHD I 24
3 "	—	—	—	6.1	—	—	3.34	"
4 神功開宝	25.4	20.7	8.6	6.4	1.8	0.7	3.39	6 AHD I 24
5 "	26.2	22.2	8.0	6.0	2.1	0.7	5.07	6 AHD J 26

Tab. 1 銅銭計測表

(単位mm・g 平均数値)

**鉄滓** 朱雀大路東側溝の東方，東築地想定位置およびその両側から多くの焼土とともに鉄滓が出土している。いずれも純粋な鉄滓はなく，土や小石を含んでいる。また，焼けたスサ入り粘土に鉄滓が付着した破片もあり，タタラの床壁の破片とみることができる。(黒崎 直)

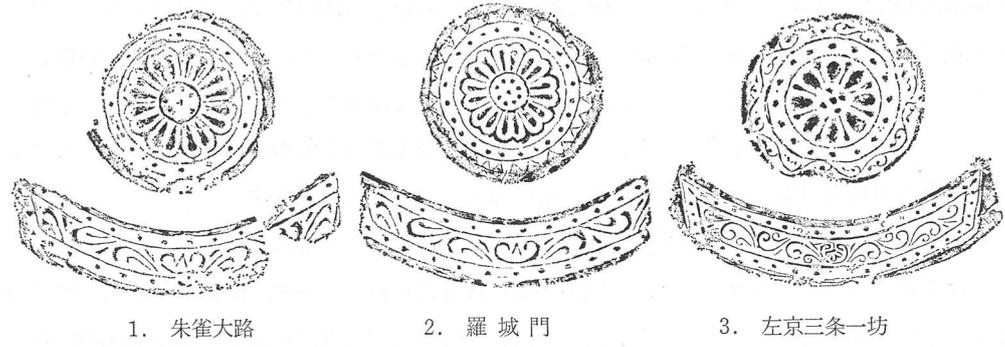
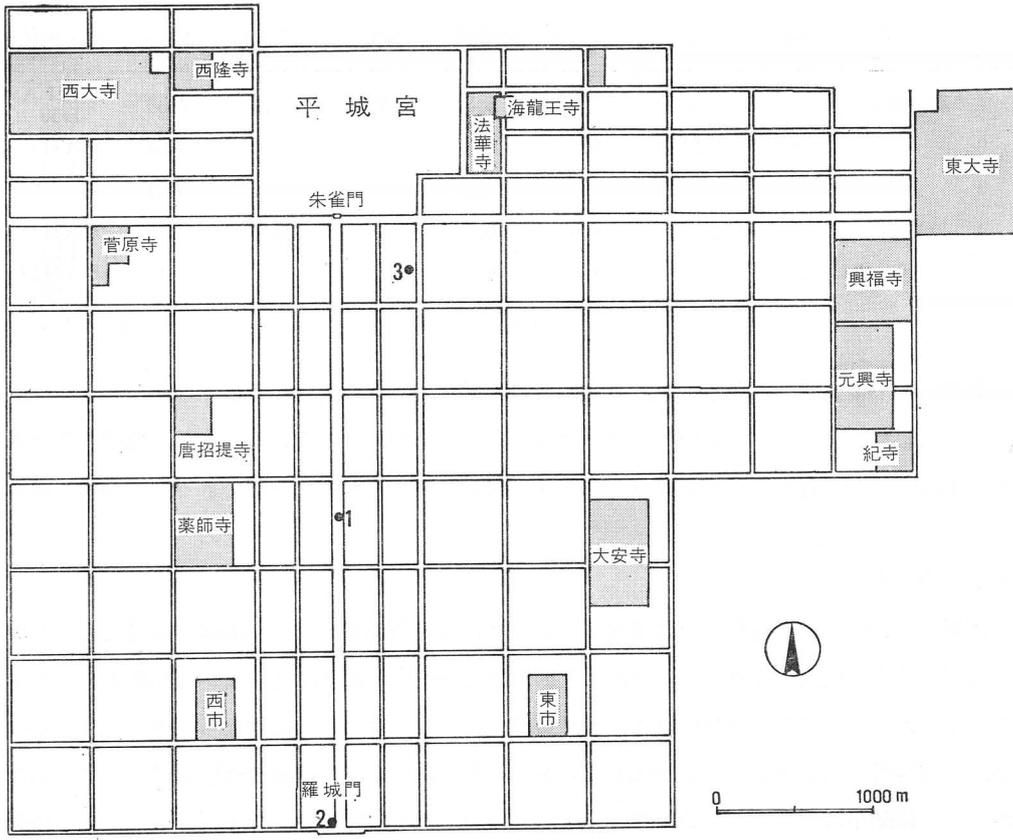
## E. 小 結

**瓦類** われわれが現在までに平城京内で行なった発掘調査地点は，30地点を越える。しかしながら条坊の状況，とりわけ坪の内部を広範囲に発掘する機会には，なかなか恵まれなかった。したがって，平城京内で使用された瓦類についても，京の造営に伴なって生産したものか，平城宮所用瓦と同じものを使用したのかという点についての明確な資料を得るには至らなかった。1968年に左京三条一坊十四坪(日本電信電話公社建設予定地内)でおこなった調査<sup>註1</sup>，1968・69年に4次にわたっておこなった羅城門跡及び周辺の調査，1969・70年に5次にわたって行なった東三坊大路沿いの調査等<sup>註2</sup>では多少なりとも資料の増加をみたが，未だ充分とは言いがたい。

今般の発掘調査において出土した軒瓦類の個々については前に述べたとおりである。平城宮内で出土する軒瓦と大きく異なる点はみられないが，全く新出のものがあつたり，宮内よりもむしろ京内の調査の際に多く見受けられるもののあることは注意を要する。

過去におこなった京内の発掘調査において，顕著に認められるものを若干あげてみよう。たとえば左京三条一坊での調査では，軒丸瓦6091-A型式と軒平瓦6691-B型式が多く，他に多く出土したものには，いわゆる東大寺式とよばれる軒平瓦6732型式がある。さきの6091-A・6691-Bの2型式は，宮内では全く出土していない。この両者はともにやや小型で，出土の比率からも組み合わせ用いられたと考えることができるものである。また，羅城門地域においては軒丸瓦6316型式と軒平瓦6710型式の組み合わせが考えられた。この両者は宮内での出土が微量である。こうした特徴的な面からすると，京の造営に関しては，宮所用瓦とは別個に生産がおこなわれた可能性を考慮することができよう。

今回の調査で出土した奈良時代の軒瓦は，軒丸瓦が5型式7個体，軒平瓦は2型式9個体というようにきわめて少量である。しかし6316—6710両型式が含まれている事実は，この朱雀大路沿いの造営に際して，何らかの構築物にこれらの瓦が用いられたこと，そして羅城門地域と同様に，6316—6710の両者が組み合わせられて使用された可能性を十分に窺わせるものである。といて，この両型式が造京の工事そのものに伴って使用されたもの，たとえば築地構築の際に用いられたものであるか否かについては，にわかには決めがたい面もある。とくに邸宅への瓦葺きの奨励が神亀元年(724)11月におこなわれており，京内居住の貴族階層が瓦葺きの建物を



1. 朱雀大路                      2. 羅城門                      3. 左京三条一坊

Fig. 10 平城京内出土軒瓦

営んだことも当然のことながら考慮にいれなければならない。その際に用いた瓦の供給源についてはさらに検討すべきであり、軽々しく論じられる性格のものではない。ただ、今回の軒丸瓦の同範品が宮内で出土していること、出土した他の諸型式同範品がすべて平城宮所用瓦の中で主要なものであることから、今回の出土瓦に対しては官による生産品であると考えよう。さらに、この2型式が東三坊大路沿いの調査、あるいは官の造営になる西隆寺跡の調査に際しても出土している点から、主として造京に関して用いられた瓦である可能性を指摘しておこう。そして、左京三条一坊十四坪でのあり方は、発掘終了範囲が約20%にすぎないとはいえ、平城宮内では全く見られない軒瓦が同坪内で主要な瓦として用いられている。このように、宮と京とでの様相が若干異なっていることも造京に関して製作された瓦が存在する可能性を十分に窺わせるものである。

(森 郁夫・岡本東三)

註1 「奈良国立文化財研究所要項」(『奈良国立文化財研究所年報 1968』)  
 註2 「1969年度平城宮跡発掘調査」(『奈良国立文化財研究所年報 1970』)

**土器類** 今回の調査で多くの土器が出土したが、朱雀大路に関連した奈良・平安時代の土器は比較的少なく、大路側溝などの変遷を知るにはやや不十分である。しかし、これに比して調査前予想もしなかった古墳時代の土器が一括出土し、当時の土器の様相を知る好資料がえられた。ここでは、古墳時代の土器を主としてまとめておきたい。

古墳時代溝の堆積土は3層に区別できたが、遺物の上からは、中層と下層の差は明確でなく、上層と中・下層の2つに区別した方がよい。中・下層の土器は、おおむね畿内で一般に「布留式土器」と呼ばれている土器に該当する。ただ、細かく観察するとこれらは、古い要素をもつもの(32~34など)と、新しい要素をもつもの(30・31・35など)とがある。なお、前者に属する壺(29)は、器形や製作技法のほか胎土・焼成などの特徴が他の土器と異質であり、東海地方の土器との類似点がみられる。また後者に属する把手付鉢(28)は、特異な器形を呈し他に類例を知らない。上層からは土師器と共に須恵器も出土している。

これらによって、中・下層の土器は4世紀後半から5世紀にかけて、また上層の土器は5世紀から6世紀初め頃の年代を中心とすることが考えられる。中・下層の土器は、天理市布留遺跡・桜井市纏向遺跡・平城宮6AAW・6AAX区遺跡などから出土した土器と共に、4~5世紀の土師器の様相を知る好資料であり意義は大きい。

(千田剛道)

## 5. 考察

### A. 朱雀大路の方位

今回の調査で朱雀大路東西両側溝を確認し、六条条間路付近での朱雀大路の位置を知ることができた。ここでは、今回の調査結果とこれまでおこなわれた朱雀大路に関連する調査成果とをあわせて検討し、大路の方位や規模などについて2・3の問題をまとめておきたい。

朱雀大路に関連する発掘調査としては、朱雀門と羅城門の調査がある。朱雀門の調査では門の基壇規模が確認され、大路北端での中心線位置が判明している。羅城門の調査では、門基壇の北縁・西縁および大路西側溝と西築地を確認している。しかし朱雀大路の中心線の位置については、正確な数値を知ることができず、その位置を推定したにとどまった。今回の調査では朱雀大路両側溝を検出し、大路中心線の位置が判明した。ただ、西側溝では遺存が悪く、溝肩がもっとも西へ拡がった時点と、これを修復した時点での溝肩とは1.2mの差がみられる。このため、両側溝心々距離に73.4~74.0mという幅が生じ、断定的な数値を得られないという欠点は残る。

以上の諸成果から朱雀大路の方位復原を試みよう。発掘によって検出した遺構のみで方位を求めると次の2例の数値がえられる。まず今回の調査で判明した大路中心線と、朱雀門の中心とを結ぶ線は、国土調査法による第6座標系の方眼北(以下、方眼北という)に対し、西へ $0^{\circ}15'50''\sim 0^{\circ}16'24''$ の振れをもつ。次いで、今回の調査で判明した大路西側溝心と羅城門の調査で判明した大路西側溝心とを結ぶ線は、方眼北に対し西へ $0^{\circ}14'42''\sim 0^{\circ}15'49''$ の振れをもつ。この2例の振れから平均値を求めると $0^{\circ}15'41''$ であり、これが今回の調査で明らかにできた朱雀大路の方位といえる。朱雀大路の方位については、先に羅城門の調査報告

書の中で、方眼北に対し西へ  $0^{\circ}12'40''$  の振れをもつと復原されており、今回の調査結果との間に約  $3'$  の差がみられる。現状では一方の数値が正で、他方が誤りであると結論づけられないが、検出遺構から得られた数値 ( $0^{\circ}15'41''$ ) がより大きな妥当性を持つものと思われる。

朱雀大路路幅については、延喜式記載の数値が築地心々距離で28丈であることは広く知られている。今回の調査では築地を検出することができず平城京での規模を遺構で確認することはできなかった。しかし、前述した方位と、羅城門での調査成果から、ある程度復原が可能である。まず朱雀門中心から南へ  $0^{\circ}15'41''$  の方位で中軸線を延長し、羅城門位置での大路心を求め、ここから調査で検出した西築地心までの距離をはかると45.0mとなる。これを折り返した距離90mが朱雀大路築地心心間の距離ということになる。この復原方法については若干の疑問も残るが、同様な操作で求めた羅城門付近での大路側溝心心距離が74.0mであり、今回の調査で判明した同間の距離 ( $73.4\sim 74.0$ ) とほぼ一致することから、あながち誤りではないだろう。今回の調査結果からみても、予想以上に溝幅が広く、築地心々距離28丈では築地に伴う犬行を充分にとることができず、むしろ30丈という数値の方がより妥当だということができる。また、発掘区周辺に遺存する水田地割も、28丈で朱雀大路路幅を復原するより30丈の方が通りが良い。しかし反面には、大路幅30丈で復原すると羅城門基壇が東西約40mの規模を持つこととなり、先に報告書で復原されていた門基壇幅32.9mと比べてあまりに大きくなりすぎよう。いずれにせよ朱雀大路の調査については端緒的な段階であり、今後多くの調査がおこなわれ、一層この問題を深めることが必要である。

朱雀大路の方位と関連して下ッ道の方位についても若干ふれておきたい。下ッ道については、平城宮跡第16・17次調査でその遺構が確認され、その位置と両側溝心心間の距離23.3mが判明している。今回の調査で検出した下ッ道では22.7mをはかり、また、その中心線は朱雀大路のそれと最大30cm以内のずれで一致している。平城宮跡の調査で検出した下ッ道側溝心心間の midpoint と、今回調査した下ッ道のそれを結ぶ線は方眼北に対し西へ  $0^{\circ}17'46''$  の振れをもつ。

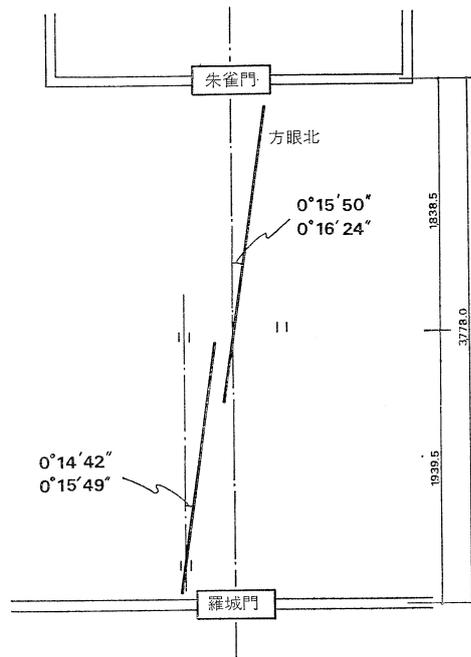


Fig. 11 方位概念図

この復原方法については若干の疑問も残るが、同様な操作で求めた羅城門付近での大路側溝心心距離が74.0mであり、今回の調査で判明した同間の距離 ( $73.4\sim 74.0$ ) とほぼ一致することから、あながち誤りではないだろう。今回の調査結果からみても、予想以上に溝幅が広く、築地心々距離28丈では築地に伴う犬行を充分にとることができず、むしろ30丈という数値の方がより妥当だということができる。また、発掘区周辺に遺存する水田地割も、28丈で朱雀大路路幅を復原するより30丈の方が通りが良い。しかし反面には、大路幅30丈で復原すると羅城門基壇が東西約40mの規模を持つこととなり、先に報告書で復原されていた門基壇幅32.9mと比べてあまりに大きくなりすぎよう。いずれにせよ朱雀大路の調査については端緒的な段階であり、今後多くの調査がおこなわれ、一層この問題を深めることが必要である。

地点名	X	Y	Z	地点名	X	Y	Z
朱雀大路調査 大路心	-147,833.00	-18,577.55 -18,577.85	56.85	朱雀門心	-145,994.50	-18,586.32	64.84
同調査 大路西側溝心	-147,869.30	-18,614.25 -18,614.85	54.40	羅城門調査 大路西側溝心	-149,719.20	-18,606.34	50.00
同調査 大路東側溝心	-147,796.70	-18,540.85	55.57	同調査 大路西築地心	-149,719.20	-18,614.34	—
同調査 下ッ道心	-147,830.70	-18,577.51	56.85	朱雀門調査 下ッ道心	-145,903.72	-18,587.47	64.84

Tab. 2 方位計測座標表

この方位で下ッ道の中軸線を南へ延長すると、横大路と下ッ道の交点と考えられている札ノ辻  
 交叉点を通り、さらに南へ延びる現在の道路ともほぼ一致する。この線はまた発掘調査で明ら  
 かな藤原宮南門（大伴門）の中心位置から西へ計画寸法（2里，1,060m）を移動させた点（推定下  
 ヲ道中心線）ともほぼ合致している。このように下ッ道の方位は、方眼北に対して17'台の振れを  
 もつことが判り、朱雀大路のそれよりも若干大きな数値となる。

また参考までに、平城宮南面大垣の方位など数箇所から復原した平城京の東西方向の条坊の  
 方位は、方眼東に対し北へ約4'~11'台の振れをもっており、朱雀大路に代表される南北方向  
 の振れよりも小さ目の数値であることがわかる。

なお、上記の計測値は、Tab.2の座標値をもとにしたものである。今後の調査によって更に  
 資料が増加することが望まれる。  
 （高瀬要一）

### B. 朱雀大路の復原

今回の調査で朱雀大路東西両側溝間の心々距離を知ることができ、さらに方位の問題から大  
 路東西両築地心々距離が30丈であると復原できた。ここでは、溝や築地あるいは路面の幅など  
 朱雀大路の細部について、平安京朱雀大路と対比しながら大路を復原してみよう。

大路側溝幅については、今回の調査で東側溝幅5.90m、西側溝幅6.40~7.60mが判明した。  
 検出した溝はかなり浸蝕されており、旧状の幅をとどめていない。平城京羅城門跡の調査の際  
 検出した右京九条一坊境の朱雀大路西側溝幅は4mである。これは東岸に土留めの杭列などの  
 施設があり、ほぼ旧状の溝幅をとどめているものとみられる。平安京の場合、側溝幅は5尺  
 (1.5m)であり、平城京の側溝を4m程と考えると、両者にかかなりの差が生じる。

築地については、今回の調査で検出することができなかったが、前述した平城京右京九条一  
 坊で検出した遺構で考えてみよう。ここでは築地心と側溝心の距離は8mである。溝幅を4m  
 として築地幅を2.1m（あるいは2.4m程であったかも知れない）とすれば、溝肩から築地際までの  
 犬行は4.95mとなる。これは平安京の15尺(4.5m)より大きな数値となり、また築地幅も平安京  
 では6尺(1.8m)であったから、いずれも平城京の方が大きく復原される。

路面幅については、今回の調査でおおよそ67mであることが判った。ただこの数値は、溝幅  
 が拡がった後のものであるため、旧状の溝幅4mにもどして考えると、路面幅は約70mに復原  
 できよう。平安京では路面幅23丈4尺(約70m)であり、ここでは両者がほぼ一致している。

以上の結果をまとめると、朱雀大路築地心々距離平城京30丈、平安京28丈となる。路面幅は

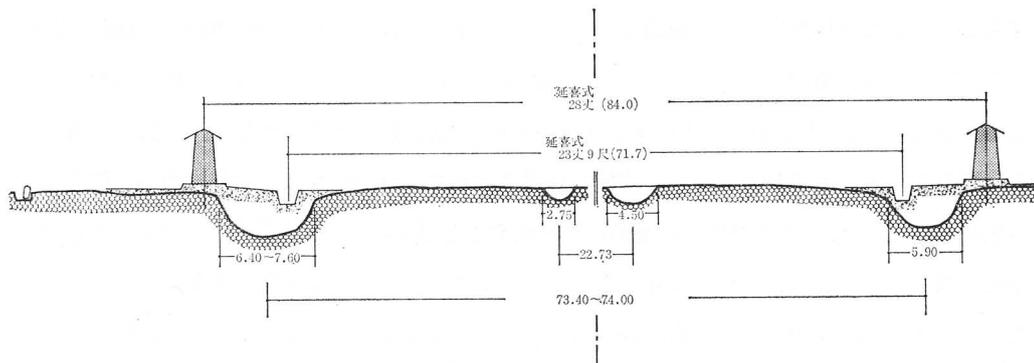


Fig. 12 朱雀大路横断面模式図

各70mであるが、溝幅は平城京約4m、平安京1.5m、築地幅は平城京7～8尺、平安京6尺と平城京の方が大きく、犬行も平城京がやや広くなる。このように、両者を比較すると、溝幅において両者の差がもっとも著しいことが知られ、これが結果的に2丈の差を生じさせているのであろう。更に今後の調査資料の増加によって平城京朱雀大路の詳細も逐次明らかになるであろう。

(岡田英男)

### C. 文献からみた朱雀大路

ここでは文献史料を中心として、朱雀大路の景観、その維持・管理、その性格、下ッ道との関係などについて考えたい。平城京朱雀大路については史料が殆んどないので、平安京を参考に考察することとする。

まず景観についてのべる。平安京朱雀大路では、両側に幅5尺の溝、基底幅6尺、高さ13尺の築地が走っていた(左右京職式<sup>木工寮式</sup>)。築地には各条毎に坊門が開かれ、また坊門ごとに門衛のための兵士の詰所がおかれていた(類聚三代格<sup>貞観4・3・8</sup>官符)。朱雀大路をも含めて大路には、三位以上・四位参議以外は家門を開くことは禁ぜられており(三代実録貞観<sup>12・12・25</sup>条)，朱雀大路の築地にはあまり家門は開かれていなかったらしい。朱雀大路に面していた左京三条一坊一・二・七・八坪の大学寮では、西門を開いてはいたが、東門が正面であり、左京三条一坊四坪にあった、源氏の学館奨学院でも東門が正門であり、また左・右京七条一坊三坪の東・西鴻臚館では、東鴻臚館は東門が、西鴻臚館は南門が正門であつたらしく(大内裏<sup>図考證</sup>)、いずれも朱雀大路に面して正門を開いていなかったらしい。朱雀大路をも含めて京内の道路には、街路樹として柳樹が植えられていた(続日本後紀<sup>承和3・7・21</sup>条、類聚三代格貞観<sup>4・3・8</sup>官符、左右京職式)。このような平安京朱雀大路の景観は、平城京でもあまり変らなかつたと考えられる。大路に面する家門建造の規制の法令は、すでに天平3年(731)以前に出されており(続日本紀<sup>天平3・9・2</sup>条)、街路樹の柳樹の存在も万葉集の大伴家持の歌から推測される(巻19<sup>412</sup>)。

次に朱雀大路をも含めて京内の道路の維持・管理についてのべる。京内の道路の維持・管理は、原則として左右京職が最終責任を負っていたらしいが、実際にはその修営は、官が行なう場合と道路に面している家あるいは官司(宮外官司)が行なう場合があつた。官が行なうのは、京内の橋、坊城(築地)の修営である。宮膳令に、京内の橋は、大橋・宮城門前の橋は木工寮が、その他の橋は京職が修営すると定められており(京内大<sup>橋寮</sup>)、坊城については、天長4年(827)6月23日官符で、理由のある損壊は修理左右坊城使(のち木工寮<sup>寮に併合</sup>)が、理由なき損壊は左右京職が修営することに定められた(類聚三<sup>代格</sup>)。道路に面している家あるいは官司が行なうのは、道路の清掃(類聚三代格弘仁<sup>10・11</sup>、<sup>3・5</sup>官符、左右京職式)、水流の流れをよくするための溝渠の掘作(類聚三代格<sup>齊衡2・9・19</sup>官符)など比較的負担の軽いものである。しかし官が行なうべきことの一部を居住の家の負担とするという傾向もみられた。齊衡2年(855)9月19日官符で、坊城の修営に関して、京職が行なうべきであつた理由のない損壊の修理には、その居住の家が新物を輸すことが定められた(類聚三<sup>代格</sup>)。このような京内の道路一般の維持・管理のあり方に対して、朱雀大路は特に官の手で行なわれることになっていた。朱雀大路の溝渠の掘作は左右京職が行なうことになっていたらしく(齊衡<sup>2・9</sup>、<sup>19</sup>官符)、掃除のためには宮城辺とともに清掃丁(雇夫)がおかれており(左右京<sup>職式</sup>)、街路樹の手入れのためには左右京職

に守朱雀樹各4人がおかれていた(左右京)。また朱雀大路には治安維持のために特に坊門ごとに兵士12人が配置されていた(貞観4・3官符)。このような管理・維持における朱雀大路の特別扱いは、もちろん朱雀大路が京内における最も重要な大路であることに関係するものであろう。

次に朱雀大路の性格についてのべる。朱雀大路は、京内で最大の広さを持ち、かつ京城正門羅城門と宮城正門朱雀門を結ぶ最も重要な大路である。平安京では大路8丈、小路4丈で、朱雀大路の30丈(平城京)あるいは28丈(平安京)の広さは、それらにくらべて格段の広さであった。唐の都長安においても、京城正門明德門と皇城正門朱雀門を結ぶ朱雀街は、150~155mという最大の広さをもつ大街であり、日本都城における朱雀大路の設定は、このような中国都城制の模倣であることはいままでのところ、朱雀大路の本質はこの道路の広さを手がかりとして考えられよう。朱雀大路の30丈あるいは28丈という広さは、道路の実用性からかけはなれた広さであり、朱雀大路の本質とは道路としての実用性をこえたところにあるのである。すなわち、朱雀大路とは、羅城門と朱雀門を結ぶ京の正面大路として、都城の威厳を示すために設定されたものである。朱雀大路の広さはそのために必要であった。このことは、古代都城が、一面では律令国家の国家としての威容を整えるために、政治の力で造られた都市であったことと関わっている。ところでTab.3は、朱雀大路がどのように使われていたのかを、関連する羅城門・朱雀門の例をもあわせて調べたものである。この表からは、朱雀大路が種々の儀式、祭事、仏事に使われていたことが知られる。これは朱雀大路が最も重要な大路であることによるのであろうが、このように道路の本来の機能と関係のないことに利用されていることは、朱雀大路の道路としての非実用的性格との関係で注意される。また新羅使、唐使などの外国使節・来朝僧が羅城門で迎接をうけ、朱雀大路を利用したらしいことは、朱雀大路が都城の威厳を示すためのものであったことに関連して注目される。ところで、以上のような朱雀大路の性格をよく示すのが、朱雀大路の次のような状況である。すなわち、平安京に関してではあるが、貞観4年(862)3月8日官符に、朱雀道は左右に築垣を帯し、またあまりに広すぎて東西の人家が離れているので、昼は馬牛の放飼いする処となり、夜は盗賊の横行する処となっているとあり(類聚三代格), また日本紀略延暦21年(802)7月12日条には、朱雀道を狼が走ったとある。前述の如く、朱雀大路は時には儀式・祭事・仏事で賑わうこともあったが、これらの史料から

内 容	出 典
朱雀門前の朱雀路を将軍が騎兵・隼人・蝦夷を率い陣列・行進す(元日の大儀)	和銅3年正月1日, 靈龜元年正月1日記 左右衛門式
外国使節・来朝僧を三橋・羅城門に迎接す	和銅7年12月26日, 宝龜10年4月30日記 唐大和上東征伝
朱雀門前で歌垣をす	天平6年2月1日記
羅城門で雨乞いす	天平19年6月15日記
朱雀門前で新型式の弩の試射を行なう	承和2年9月13日記
東西市人ら朱雀路に臨みて雨乞いす	承和6年6月6日記
災疫を防ぐために神泉苑・七条大路衢・朱雀道東西で般若心経を誦す	貞観7年5月13日記
朱雀門前で京邑の貧人に物を賜う	貞観10年12月7日記
太皇太后の六十才の賀に朱雀大路で京師の貧窮者に物を賜う	貞観10年2月22日記

Tab. 3 朱雀大路利用事例一覧表

想像される通常の朱雀大路とは、左右に築垣を帯し、幅30丈あるいは28丈で延々と続く大空閑地帯とでもいうべきものであった。このような状況は、前述した朱雀大路のもつ性格から必然的に生じてくるものである。前述した維持・管理における朱雀大路のもつ特別扱いは、それが最も重要な大路であることによるのであろうが、またその実用性からかけはなれた広さとも関わるものであった。朱雀大路に特に兵士が設置されなければならなかったのは、その広さからくる、前述のような治安の悪化によるものであったのである。

最後に、朱雀大路と下ッ道についてのべる。朱雀大路が、前代に設定された下ッ道を踏襲して設定されたものであることは、周知のところである。前述の如く、本調査では、朱雀大路が下ッ道の中心線をほぼ踏襲し、両側に拡幅して設定されたものであることを確認した。ところで、下ッ道は7世紀代に上ッ道・中ッ道・横大路・竜田道などとともに大和平野に設定された官道である。平城京の時代にも、下ッ道・竜田道はよく利用されていた。神亀元年(724)10月の聖武天皇の紀伊行幸には、下ッ道とそれに連なる巨勢路・紀路が利用された(万葉集巻4<sup>543</sup>~<sup>545</sup>)。竜田道には平群駅がおかれ、万葉集には竜田越の歌がいくつか残されており(巻4-626, 5-877, 6-971, 9-1742~52, 15-3722<sup>2</sup>)。新羅使・唐使などの外国使節の入京(Tab. 3)、勝宝元年(749)の宇佐八幡大神の入京(続日本紀<sup>12</sup>・18条<sup>3</sup>)、同6年(754)の鑑真の入京(唐大和上<sup>1</sup>・東征伝)の際には竜田道、下ッ道が利用されていた。また霊亀元年(715)には竜田道の東方への延長である都祁山道が整備され(続日本紀<sup>6</sup>・10条<sup>4</sup>)、この道は天平12年(740)藤原広嗣の乱の時の聖武天皇の東国行に利用された(続日本紀<sup>12</sup>・10・30条<sup>5</sup>)。ところで、前述した朱雀大路の本質との関連で考えると、これらの朱雀大路につらなる道路のうち、難波に至る下ッ道・竜田道のルートが特に重要な意味をもっていたと考えられる。前述の如く、この道路は外国使節などの往来に利用されたが、そのような公式に羅城門で迎接しなければならない者の難波から羅城門へ至る道路として、重要な意味をもっていたと考えられる。竜田道は山陽道へ、都祁山道は東海道へ連絡できたと考えられるが、これらの道路は、山陽道・東海道諸国を連ねる駅路としての意味は、稀薄であったようである。そのような道路としては、平城遷都とともに和銅4年(711)正月都亭駅といわれる6駅が設置され、平城京の裏側(北部)に起点をもち、山陽・東海道へ連なる二道が、新たに開かれていたのである(続日本紀<sup>4</sup>・正・2条<sup>6</sup>)。 (今泉隆雄)

註1 坂本太郎「大和の古駅」(『末永先生古稀記念古代学論叢』所収)

註2 岸俊男「大和の古道」(『日本古文化論攷』所収)

註3 直木孝次郎「平城遷都と駅の新設」(『続日本紀研究』158)